

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑧

「なぜあなたは」への答え

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

かつて、人権教育の大会などでレポート発表をする時、必ずと言っていいほど「なぜあなたは人権教育にかかわるのか」という質問がきました。この質問は、わたしの「本気度」を試すための、ある種の踏み絵であったのだろうと思います。そして、そういう質問をされる方は、どうやらなんらかの当事者だったようです。

「当事者ではない」わたしは、部落出身や在日コリアンの生徒たちとかかわるスタンスを常に問われてきました。仮にわたしがなんらかの当事者であれば「〇〇の当事者です」と言えば、先の質問はそこで終わりになるでしょう。しかしそうでない場合、先の質問に答えるためには、人権教育や差別問題との出会いをはじめとした「自分」を語る必要が出てきます。あるいは「自分のためです」という「模範解答」もあります。この言葉の含意は「差別／被差別の関係から自分自身を解放するため」です。

ただ、どうにもわたしはこうした言葉がしっくりきませんでした。当時のわたしの答は「楽しいから」でした。わたしは人権教育を通してたくさんの人と出会ってきました。そしてその出会いによってわたしの価値観はどんどん変わっていきました。そうやって変わっていくわたしでいることは、とても楽しいことでした。この「楽しい」という気持ちは今も持っています。ただ、わたしの中にはもうひとつの答がありました。

わたしが教員になった当時、当事者ではない人が差別問題とかかわるスタンスをあらわす言葉は、せいぜいが「随伴者」くらいだったでしょうか。ただ、この「随伴者」という言葉には、あくまでも意思決定は当事者がおこない、それに付き従うものというニュアンスがつきまといまいます。しかし、教員として生徒とかかわる限り、たとえば生徒が「進級をあきらめる」という意思決定をした場合、それに従うわけにはいきません。わたしにとって一番正直な言葉は「生徒のために」でした。しかし、この答えに対して「『〇〇のために』は上から目線であり、その構造そのものが差別的だ」という批判がなされたことがあります。このよ

うな批判を知っていたわたしは、「生徒のために」とは答えられなかったのです。

しかし現実には、わたしは「生徒のために」と思い、家庭訪問をしてきました。留年しそうな生徒の家庭訪問は深夜まで及びました。家出した生徒の家庭訪問を繰り返した時は、年間100日になりました。隣保館学習会にかかわったのも「部落出身生徒のために」と考えたからです。「毎週水曜日の夜は隣保館学習会」という生活が何年も続きました。在日外国人生徒交流会も「在日外国人生徒のために」やってきました。なかなか人が集まらない中、やっと誘いに応じてくれる生徒があらわれた時は、「この子が来た時、ひとりだったらダメだ」と思い、卒業生たちに必死で連絡したこともあります。もちろん、こうした活動がまわりまわって「わたしのために」となるという側面があるということは否定しません。しかし、やはり「〇〇のために」がとりくみの出発点でした。ですから、心の中では「『〇〇のために』でええやん」と思っていました。

例えば、現在わたしの勤務校では3年生の人権学習では10人の当事者を招いてミニ講演会をおこなっています。生徒たちは10人の中から2人を選んで聞きます。その中には虐待サバイバーや発達障害、シングルマザーの方がおられます。こうした方々に来ていただく理由は、わたしの勤務校にはそうした当事者の生徒がいるからです。当事者の生徒が当事者と会うことで、自分の生きづらさを客観的に見つめ直すきっかけにしてほしいと思っています。ヘイトスピーチへのカウンターに参加したのも、大切な友だちに浴びせられる差別発言を許せないと思ったからです。近年「アライ」という言葉が使われるようになってきました。この言葉は言うまでもなく「同盟」や「支援」をあらわす英語「ally」からきています。おそらくわたしはずっとアライとして生きてきたのだらうと思います。

しかし、アライであり続けることが生み出した、もうひとつの感情がありました。それは次号に書くことにします。